The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

印度學佛教學研究第五十八巻第一号　平成二十一年十二月

『伝光録』と『林間録』の関係性について
――永嘉玄覚・黄檗希運の嗣法にまつわる記述より――

宮地清彦

一　北宋末の覚範慧洪（一〇七一～一一二八）撰『林間録』の名前が出るのは、『伝光録』中では第四十四祖・投子和尚章、即ち投子義青（一〇三二～八三）に関する件のみである。

（一）洪覚範作せる石門林間録に曰く、古塔主は雲門の世を去ること無慮百年にして而して其嗣と称す。青華厳、未だ始より大陽を識らず。特に浮山遠公の語を以ての故に之を嗣で疑はず。二老皆伝言を以て之を行て自若たり。其己に於て甚だ重く、法に於て甚だ軽し。古の人の法に於て重き者は、永嘉黄檗是なり。永嘉は維摩経を閲するに因て仏心宗を悟る。而も往て六祖に見へて曰く、吾れ宗旨を定めんと欲すと。黄檗は馬祖の意を悟て而して百丈に嗣ぐ。

覚範は、古塔主こと薦福承古（？～一〇四五）及び青華厳こと投子の二人を挙げ、先師からの間接的な伝言だけで事足れりとし、仏法を軽んずる者と断じている。逆に覚範の理想型は永嘉玄覚（六七五～七一三）と黄檗希運（？～八五〇）にあるとされる。ちなみに瑩山は薦福を認めているわけでなく、投子和尚章の別所にて雲門→薦福の正当性を説く史伝類を誤りだと断じている。

しかし、瑩山は直後に「洪覚範なをしらざるところあるに似り」として、（一）の説を否定する。では、覚範は何を理解していなかったのであろうか。

（二）祖師、欺くべからず。仏法に私なきことを貴ぶ。故に嗣続し来り。大陽も円鑑を憑む。投子も円鑑を敬ふて命を疑はず法を重くす。三師共に曩祖の宗旨を遺落せず。後代に久く洞山の家風を嘱累し来る。実に是れ我家の奇特仏法の秘蔵なり。今も現前其器を得ざらん時、達人に附け置くこともあるべきなり。

「仏法に私なきことを貴ぶ」は教理的な無我を重んじるの意味でなく、著名なる先師からの嗣法に固執するあまり仏法を軽んずる姿勢を断じたものである。

ここで注意すべきは、大陽警玄（九四三～一〇二七）・円鑑こと浮山法遠（九九一～一〇六七）・投子の三祖師が多くの先師達の説く宗旨の他に、洞山良价（八〇七～六九）の家風を伝えたことの強調にある。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

以前に指摘したのだが（「『伝光録』における無情説法について―洞山悟本大師章を中心として―」、『宗学研究』第五〇号、二〇〇八年四月、八一～六頁）、『伝光録』での洞山は第八祖・仏陀難提尊者章の拈提にて先ず取り上げられるものの、その大悟の機縁は一度否定され、後述の第三十八祖・洞山章にて再構築をするという特異な経過を辿る祖師となっている。詳述すると、第八祖章での洞山は「全身説法」の理の体得者とされているのだが、雲巌曇晟と潙山霊佑（七七一～八五三）から更なる参究を促され、この二人から『華厳経』と『阿弥陀経』の名を示され、著名な過水偈の件を経た後、「無情説法」の理の体得者として完成する。二章にまたがり、その大悟の機縁を検証された祖師は洞山しかおらず、それは瑩山の「無情説法」の理を重視する姿勢に繋がっていくであろう。

瑩山が批判する覚範や薦福、そして（一）で名の出た永嘉・黄檗について、単なる面授嗣法の案件からだけでなく、彼らの信ずる教理（特に無情説法）が瑩山のものと符合するかどうかは一応見ておく必要がある。

二　永嘉玄覚について、仙石景章氏「『禅宗永嘉集』再考」（『印度哲学仏教学／北海道印度哲学仏教学会』第六号、一九九一年、二七三～八七頁）によると、玄覚の諸法因縁生起説や空観思想は『維摩経』『肇論』からの影響が色濃いとの指摘もある。その『永嘉集』には、まず名と体の二者を表わし、これらは仮の存在として並列的に動きながらも、体から名の生成関係が述べてある（大正蔵巻四八・三九三頁下）。この関係が、本論の重要なキー・ポイントとなることをまず述べておく。

また『肇論』と言えば、松本史朗氏が「涅槃無名論」の物我冥一の物と我の語順を重視され、物と我が神秘的に合一するだけでなく、「我」が「物（諸法、無情）」に会って影響を受ける、即ち「諸法から人への悟り」、無情が有情より先んじて成仏していることを指摘されている（『道元思想論』、大蔵出版、二〇〇〇年、二六二～五頁）。

しかし、『永嘉集』では物我冥一と同義である境智合一を例に挙げ、境は智に拠らねば認識できないし、智は境に拠らなければ生じない。また智が生じる時は境を認識して智を生じ、境を認識すれば智が生じて境を認識すると説かれてある（三九〇頁下）。玄覚にとって境と智の関係は同時進行的色彩が強く、『永嘉集』と松本説を照合させると、後者は一側面の指摘に留まっていると言わざるを得ない。

この『永嘉集』にある相関関係が、本論の重要なキー・ポイントとなることをまず述べておきたい。

三　「無心」に近いものが、『永嘉集』「無自性」である。

（三）禅那則身心寂怕。安般希微。住寂定以自資。運四儀而利物。智慧則了知縁起。自性無生。万法皆如。真源至寂。雖知煩悩無可捨。菩提無可取。而能不証無為。度生長劫。広修万行。等観群方。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

下及諦縁。上該不共。大誓之心普被。四攝之道通収。総三界以為家。括四生而為子。悲智双運。福慧両厳。超越二乗。独居其上。如是則大乗之道也（大正蔵巻四八・三九二頁中）。

特徴として三点ある。

○禅那等によって寂定に至り、そこから衆生を利益する。

○智慧によって縁起を了知すれば、すべてのものは無性であって、真実であるという。

○真実を悟るには、定から智慧への方向性を示し、智慧による無自性の悟りを志向する。

周知のように、黄檗は馬祖道一（七〇九～八八）の継承者であるわけだが、『馬祖語録』に見られる「平常心是道」解釈では、馬祖にとっての「平常心」は「造作」をはじめとする種々の要素（「汚染」の範疇に入れられる）を有していない。

例えば「道不用修、但莫汚染」の「修」は「汚染」＝「造作」と考えられていたこととなる。つまり、馬祖にとっての「平常心」や「道」は孤高性を持つ存在だったのであろう。しかしながら、それは知的分析や理解のみで禅を捉える傾向を持ち、概念的修行に陥る危険性を内包していたのである。

前述の如く、黄檗は修行者の積極性による無心の表出を説いているわけだから、そこに馬祖禅との特異性を見出すべきであろうし、黄檗が一切「平常心」の語を使用しなかった理由に繋がっていく。そして黄檗にとって先達である永嘉の「無自性」を、伝統的に受け継いだのが「無心」なのであろう。

四　瑩山は馬祖と黄檗の間にある相違点を知っていたようであり、投子章で以下の如く述べている。

（四）夫れ薦福承古を古塔主と曰ふ。雲居弘覚禅師の塔前に棲止す。雲門より後百年に一出たり。僅に雲門の言に解する所あるを以て、乃ち曰く、黄檗の見処円ならず、古今豈隔つべけんや。馬祖の言を明らめながら馬祖に嗣がず。我れ雲門の言を明らむ、須らく雲門に嗣ぐべしと云て終に雲門に嗣ぐと称す。諸録、悉く雲門の嗣に載す。是れ録者の錯りなり、笑ひぬべし。

傍線部は「見処」「馬祖の言」という所から、単なる儀礼的な面授嗣法を云々しているわけでなく、黄檗が馬祖の思想の何たるかを知っていながら、それとは違う方向へと進んだことについて、薦福が「円ならず」と批判している。

次に、薦福自身は「雲門の言」を明らかにしている自負の強さからか、儀礼的面授嗣法など無意味と言わんばかりの姿勢を打ち出している。その薦福の姿勢は馬祖禅を変容させた黄檗禅への批判であり、具体的に言えば、「平常心」→「無心」に変化させたことへの批判であり、かつ雲門禅の正当性を宣言したものと解釈できる。そして瑩山が薦福の説を完全否定していることが重要である。

（五）香厳撃竹に明らむ、何ぞ翠竹に嗣がざる。霊雲桃花に明らむ、何ぞ桃華に嗣がざる。憐むべし、承古は仏祖屋裏嗣承あることを知らず。若し覚範も義青和尚を疑はば、屋裏の相承を知らざるが

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

如し。故に汝己に於て軽く、法に於て到らずと謂ふべし。然れば林間録の記、用ゐるべからず。

「香厳撃竹」「霊雲桃花」はいわゆる無情説法の代名詞的機縁であるが、「どうして竹や桃の華に嗣法しないのか」等の現実離れした瑩山の問いかけは、黄檗を疑う薦福や、馬祖の禅思想を変化させた黄檗像を知らない覚範への強烈な疑念をうかがわせるものである。

そして儀礼的な面授嗣法の枠を飛び越え、無情説法へと場面展開したことは、(二)でも述べた洞山禅を下敷きにしたことと共に、瑩山にとっての黄檗(永嘉も含む)禅思想は、『伝光録』での無情説法で語られるべきものだったのである。

五　この黄檗と永嘉に関連あると思しき箇所が、『伝光録』には数箇所見られる。

a　「尽大地是法身」について

第三十五祖無際大師章にて、『肇論』を読んでいた大師が「有時、肇論を看て万物を会して己れと為す者は、其れ唯聖人かと云に至て、師、乃ち机を拊て曰く、聖人に己れ無く己れならざる所なし。法身無象、誰か自他を云はん。円鑑霊照にして、其間、万像体玄自ら現ず。境智非一、孰れか去来を云はん」と述べた箇所がある。

「法身無象」は周囲に遍満している法身とも解釈でき得るが、後の「円鑑霊照」以降がある以上、法身と円鑑さらに体玄は同義であり、万像は映し出されるものと解され、同時に体玄も自然と現れている存在となっている。つまり、万像があるからこそ円鑑は円鑑としての役目を果たすわけであり、「法身無象」は永嘉の「無自性」と同義である。

そして、この映し出す・映し出されるの関係は永嘉の因縁生起説を髣髴とさせるものであるし、「境智非一、孰れか去来を云はん」にて反語表現される一如の関係は『永嘉集』の「境智合一」と同義である。

b　第四十九祖雪竇鑑禅師章では、前述の薦福が信奉する雲門の言葉が重要な位置を占めている。

(六)謂ゆる爾時に迦葉菩薩、仏に白して言く、世尊、仏所説の如き、諸仏世尊に秘密語ありと。是の義然らず、何を以ての故に。諸仏世尊唯密語ありて密蔵あることなし。譬ば幻主の機関、木人の如し。人、屈伸俯仰するを観見すと雖も、内に之をして然らしむるものあるを知ること莫し。仏法は爾らず。咸く衆生をして悉く知見することを得せしめ、云何ぞ当に諸仏世尊に秘密蔵ありと言ふべき。仏、迦葉を讃して、善哉善哉、善男子、汝が所言の如し。如来に実に秘密の蔵なし。何を以ての故に、秋の満月の空に處して顕露に、清浄にして翳なきが如く、人皆観見す。

これは『涅槃経』如来性品(大正蔵巻一二・三九〇頁中、他)からの引用であり、ほぼ原文通りである。第四十九祖章の機縁は雪竇のことよりも、(六)が多勢を占めており、瑩山の力の入れ様も分る。概説すると操り人形師が人形を操ってる

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

際、その姿を見せないけれども、仏法はそうではなく、秘密蔵ではないことを釈尊と迦葉が確認し合ったとする。その確認事項の象徴として秋の満月の空を例示しているのだが、それは無情であることに疑いないものの、「尽大地是法身」のような完全なる等記号で法身と結ばれるのではなく、無情と法身の位置関係は前述の第三十五祖章と（六）から映し出す・映し出される及び操る・操られるの関係と考えてよい。

次の拈提で雲門の言葉が解釈の鍵となる。

（七）夫れ一切の言を聞かんに必ず心を会すべし。言に滞ること勿れ。火と謂ふ是れ火に非ず、水と謂ふ是れ水に非ず。故に火を語るに口を焼かず、水を語るに口を湿ほさず。知りぬ、水火実に言に非ず。・・・。又雲門大師曰く、祇だ此れ箇の事、若し言語上に在ては三乗十二分教、豈是れ言語なからんや。什麼に因て教外別伝と道ふや。若し学解機智よりせば、祇だ十地聖人の如し。

雲門の語は『景徳伝燈録』巻一九（大正蔵巻五一・三五六頁下）・『五燈会元』巻一五（卍続巻一三八・二七七頁右上）からの引用である。禅宗の常套句と言うべき「言語に執着せず」を述べたものとも考えうるが、第三十五祖章や（六）が前提としてある以上、言語を発する本体・言語として発せられた仮の水火の関係を提示していると解すべきではないか。この観点からいけば、傍線部は、『雲門録』「天是天、地是地、云々」（大正蔵巻四七・五四七頁下）の解釈に関する瑩山の指針なのである。

瑩山から見れば、無情なる天地がそのまま仏性体ではなく、天を生み出す本体（法身）と、生み出されて「天」と認識される存在が絶えず同時進行する上での一如なのである。

六　瑩山は純粋に永嘉・黄檗の禅思想を受け継ぎ、その独特の無情説法・無情成仏観を提示したと言える。黄檗の禅思想を充分に理解し得なかった覚範や、黄檗の禅系譜に疑いを持つ薦福に反駁するあまり、瑩山は薦福の師・雲門に眼を向け、代表的な語句「天是天、地是地、云々」にまで、上記の如く独特の解釈を施すまでに至った。

この瑩山の強烈な反駁の背後には、総てを法身と同レベルに見なす馬祖禅の「平常心是道」的思想への疑念があったであろうし、永嘉の思想をバックに置きながら、師資関係を無視してまで馬祖禅の変換を実行した黄檗に対し、相当の加担をしていたと言える。

つまり、瑩山にとっての『林間録』とは、薦福を批判したまでは許せるものの、（一）にある「馬祖の意を汲んだ黄檗」という祖師像を打ち出した書であり、それは瑩山の信じる禅思想を脅かすものであったと考えるべきである。

〈キーワード〉伝光録、林間録、永嘉玄覚、黄檗希運、覚範慧洪、瑩山紹瑾、無情成仏

（曹洞宗総合研究センター専任研究員）

NII-Electronic Library Service